

令和元年 12 月 3 日  
NPO 法人つがる縄文の会 理事長 川嶋大史

【タイトル】

「つながる青函（津軽海峡交流圏）の魅力を伝えたい」

北海道新幹線が開通して津軽海峡交流圏は陸続きとなり、短時間で行き来できるようになった。これまでの「青森」と「函館」に「津軽半島」と「道南地方」の彩りを加えると、両地域特有の歴史と文化に驚くほどの共通点を見出せる。

その一つが 2021 年の世界文化遺産登録を目指している「北海道・北東北の縄文遺跡群」だ。世界遺産とは、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が認定し、世界の宝物として守る必要のある貴重な文化財や自然のこと。登録にはその遺産の価値が認められること、将来にわたって守って行く仕組みが整っていることなどの条件があり、厳しい審査を受ける。遺跡の保護、保全が前提だが、多くの観光客が訪れることが想定されている。

193ヶ国が条約の締約をした世界遺産は、いま1092件（文化遺産845件、自然遺産209件、複合遺産38件）ある。青森県と秋田県に跨る「白神山地」は世界最大級の原生的なブナ林が1993年に自然遺産として認定された。北海道では「知床」が貴重な動物、植物が存在することから2005年に自然遺産として認定されている。

今回の親子モニターツアー（青森県と北海道の共同事業「北海道新幹線で行く！青森への日帰り親子モニターツアー」令和元年11月24日実施）で道南の皆さんと接してみると「縄文とアイヌ」の関係性を聞かれた。目からウロコである。私はちゃんと答えられなかった。確かに紋様や色使いが似ているし、アイヌとは縄文のDNAを受け継いだ文化のような気がする。

1万年もの長い時代、争いごともなく自然と共生していた時代が「縄文時代」である。全国に縄文遺跡はあるのだが、北海道・北東北にある17の縄文遺跡がその1万年の変遷を証明できるそうなのだ。道南の縄文遺跡もその流れの中にあるし、その先のアイヌ文化との関連性を私たちも知りたいと思った。

津軽から北海道に渡った人も多く、言葉使いがとても似ていると感じたし、昔も今も同じ文化圏に暮らしているのだと思えた。新青森駅からではなく、奥津軽いまべつ駅から入る津軽半島はまた違う趣きがあると思えた。

私自身が「なるほど」と驚いた。津軽中里駅までのバス「あらま号」に乗車して間もなく、外ヶ浜町の「大平山元遺跡」の近くを通るのだ。地元の人々の歓迎を受けて気づいた。ここは日本最古の土器のかけらが発見された場所。紀元前1万3千年頃に始まったと考えられている縄文時代の草創期にあたる。

つまり世界文化遺産に登録されようとしている17ある遺跡の最初がこのツアーの始まりでもあった。ここから南下することで、青森県内だけでも「縄文時代1万年の旅」が可

能なのだ。ストーブ列車で有名な「津軽鉄道」に乗って金木町を通過して五所川原市へ。日本の原風景とも言えるような美しい岩木山と津軽平野を眺めた後は「立佞武多の館」へ。ここからは見どころ、喰いどころの多い奥津軽の旅が満喫できる。温泉も大きな魅力だ。

その先につがる市の人気スポット「JR木造駅」がある。17メートルもの高さを誇る土偶駅舎は、国の重要文化財指定の「遮光器土偶（愛称・しゃこちゃん）」を模した駅舎。出土した「亀ヶ岡石器時代遺跡」は縄文時代の晩期にあたるため、わずか数時間の移動で「1万年の最初と最後が体験」できる。

そして、縄文時代全体を証明できる場所が青森市の「三内丸山遺跡」である。ここは前期・中期に巨大なムラがあったことを示せる日本最大の遺跡で、ここを拠点にして「北海道・北東北の縄文遺跡群」を歩けば縄文時代の全体像がわかるはずだ。一日で全部は歩けない。ならば何度も行き来しよう。神秘とロマンが眠る津軽海峡交流圏は魅力がいっぱい。お楽しみはこれからです。